

生まれ育った滋賀の原風景を 新しい音楽で表現したい。

湖 INTERVIEW

作曲家

中村典子さん

滋賀で得たインスピレーションが作品となり、国内外で評価されている作曲家の中村典子さん。故郷へのあふれる思いを創造のエネルギーに、新しい発想で独自の音楽を生み出しています。さまざまな表現の方法と発表の場を提案し、母校で若い音楽家たちの指導に力を注ぐ中村さんのさらなる活躍に期待がふくらみます。



高橋 ● 滋賀の自然や風物を独自の音楽で表現される中村典子さんは、平成22年度滋賀県文化奨励賞を受賞されました。すでに世界でも高い評価を受けていらつしやいます。故郷の滋賀で作曲活動が評価されたことについて、どのように感じられましたか。

中村 ● 室生犀星の詩「ふるさと」は遠きにおいて思ふもの…」のように、故郷に時に厳しいものですが、故郷に私の作品を愛していただいていることに深く感謝しており、とてもうれしかったです。

高橋 ● 草津市ご出身で琵琶湖の近くに長く住んでおられたそうですね。中村さんの作品をいろいろと聴かせていただくと、水をイメージした楽曲が多く、自然界を一つにまとめた芸術のように感じられます。

中村 ● 水は命の源であり、生命の母です。その水をたたえた琵琶湖を見続けてきた数十年が、影響していると思います。中学生の時はさらに



草津市の志那浜。琵琶湖の自然が中村さんの創作の源になった(写真提供/びわこビジターズビューロー)。

ていたとか。子どもの頃にふれたという記憶も甦ってきたことでしょうか。

中村 ● デビュー作の「ノリ」は声楽とピアノと打楽器のための曲で、子どもの頃からのわずかな違和感が、二十代初めにようやく音楽の形になったといつていい作品です。この曲はバレエ化され、サンフランシスコのオペラハウスで行われた国連憲章50周年記念のバレエフェスティバルで3回上演されました。また、韓国伝統舞踊に基づく現代舞踊作品としても京都、ソウルで公演されました。

高橋 ● 中村さんの音楽に文化や芸能そのものような奥深さを感じられるのは、昔から変わらない原風景が残っている滋賀に長くお住まいだったからでしょうか。オーケストラに邦楽器をはじめ、風鈴や日常のさまざまな音を取り入れるなど、他ではあまり見られない音楽スタイルも作り出されていますね。

中村 ● 初めて聴かれた方はびっくりされると思います。現代音楽というジャンルは、目の前にも持っている、五線譜の中では表現できなかったりします。例えば、KEIBUN第九合唱団の歌声が聴こえるホールの隣で、近くの家を軒先では風鈴が鳴っているとか、それらがいつか新しい表現によって違和感なく交じり合う世界を私は夢見ていますので、それを表現することができれば素晴らしいと考えています。

と輝く琵琶湖が見える校舎で学び、高校の通学途中でも毎日のように琵琶湖を見ていました。琵琶湖があるために、そこが一つの小宇宙のように感じられ、人間と社会、生命について考えるきっかけになりました。私の思考を形作った琵琶湖は、とても大きな存在です。

高橋 ● 進学された京都市立芸術大学で作曲を専攻され、ご自身の音楽スタイルを確立するまでには悩みやご苦労もあったように思いますが、いかがですか。

中村 ● 小学生の時、学校の講堂でオルガンを習っていた、そこから三上山や緑が広がる田んぼが見えました。この風景とオルガンで弾く西洋音楽がマッチしていないことに、なぜか違和感を感じていました。音楽の本に描かれているイタリアの風景と、ヴィヴァルディの「四季」はびたりと合っているのに、もどかしい思いがずっとあり、大学を卒業する頃、何を表現していいのかわからなくなりました。そんな時、自分の足元にある日本の音楽や歴史を知らないことに気付き、草津にある200ほどの神社を自転車で巡ったのです。そこに差し込む微細な光、森の土、風が語りかけてくる何かが作曲を始めさせた、と感じています。

高橋 ● 幼少時代には、地域の神社に伝わる巫女舞や講踊りの練習もされ



昨年12月13日コチの会・東風第3回公演のステージより(左が中村さん、右が箏の福原左和子さん、中川幸夫撮影)。

高橋 ● 一昨年に発表された「ホカヒ」は、仏具のりんをはじめ、金属打楽器だけで構成された曲でした。さまざまなバージョンでも演奏されていますが、この曲にはどのような思いが込められているのですか。

中村 ● 「ホカヒ」という言葉には「最初の水の一杯を、すべての霊に捧げる」という意味があり、京都の鎮魂の祭りである祇園祭の鉦建ての日に、文明が生み出す犠牲への祈りとして書きました。もともとは滋賀在住の打楽器奏者で友人の宮本安子さんのために作ったソロの作品です。大津では弦楽器、管楽器、鍵盤楽器、打楽器と一緒に演奏し、水口ではそこに邦楽器が加わったり、守山では舞踊のほか、被爆地である広島や長崎のパーションがあったり、FMのドラマ音楽として放送されるなど、多彩な展開となりました。

中村さんの作品は音楽にとどまらず、自然界を一つにまとめた芸術のようです。

滋賀銀行常務取締役 高橋祥二郎

音楽を生み出す母ともいえる琵琶湖は私にとって大きな存在です。

作曲家 中村典子さん(なかむらのりこ)

高橋 ●長崎に行かれたら、そこに合うように編曲されるわけですか。
中村 ●ええ。服のサイズを体に合わせるように作り直します。その場所に演奏者が立つた時に感じることを想像し、前もって準備する、非常に女性的な対応です(笑)。できれば東日本大震災があった東北にも赴き、私自身の演奏で、現地の鎮魂になればと願っています。

中村 ●確かにそう思います。とくに今回、クラシックの現場からも新しい作品が次々と生まれました。人間は、芸術なしではいられなくなっていると感じます。
高橋 ●中村さんは劇場空間全体を使って音楽作品を上演する、シアターピースにも取り組まれています。一年、しが県民芸術創造館で行われた「生命の舟」はとてもよかったです。NHK大河ドラマに流れそうなイメージの音楽が印象的でした。
中村 ●実は私も20代ぐらいまで、ずっと大河ドラマを見ていました。その時代に流れた音楽が、私の血肉になつていたのでしょいか(笑)。昨年は

まだ描かれていない風景や将来像を表現するのが作曲家の仕事。近江八景の音楽も一つの可能性です。



Profile ●中村典子

1965年草津市生まれ。京都府在住。京都市立芸術大学音楽学部作曲専修卒業。京都音楽協会賞受賞。同大学院入学後、プレーメン芸術大学へセメスター派遣留学。91年京都市立芸術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。大学院賞受賞。日本現代音楽協会、日本作曲家協議会会員。97年第1回小倉理三郎音楽奨学金を受け、東アジア音楽研究のため渡韓。2001年京都市芸術新人賞、平成22年度滋賀県文化奨励賞受賞。現在、京都市立芸術大学准教授。

長浜市立下草野小学校の依頼で、シンボルの「かしの木のうた」を作詞作曲し、シアターピース「かしの木物語」として小学生や地域のみなさんと大合唱しました。その空間にいる全ての人々が参加して、一つのメッセージを発したり、受け取れることがシアターピースのいいところです。

高橋 ●最近ではピアニストの辻井伸行さんのように若い音楽家が海外でも活躍され、日本の音楽レベルが高くなつていっているように感じます。
中村 ●クラシック音楽において西洋文化圏からの創作表現はある程度完成され、演奏家では、いまアジアが最も輝いていると思います。そこまでいけた、とつとう創造の出番ではないかなと。初めてそう聞えるところに来ていて、そう感じます。



昨年11月、しがぎんホールで催されたクラムジカ第5回公演のリハーサル風景。

高橋 ●地域の人が一緒になって演奏されたことは素晴らしいですね。一方で、中村さんは母校の京都市立芸術大学で教鞭を執っておられます。後進の指導にあたって、モットーにされていることはありますか。

高橋 ●中村さんは今後、どのような音楽活動をされる予定ですか。
中村 ●クラシック音楽は、これから10年、20年かけてアジアで最もエネルギーが高まっていくと感じています。その時を作っていく団体をと、同じ大学の仲間3人で「クラムジカ」という名前前で、数年前から活動を始めました。クラムジカとは「不器用な音楽」という意味の造語。その第一歩が大津だったのです。

中村 ●創作の前提となる基礎にあたる和声法、対位法などから音楽を把握する楽曲分析を教えています。が、学生たちには「音楽は何を書いてもいい」と言い続けています。この言葉は実際とても深く、その何かは自分で探し出す必要がある。そこから生命や社会、歴史に対する責任が生まれます。そのための技術や思考方法の基礎を伝えたいと思っています。

高橋 ●昨年11月、滋賀県文化奨励賞受賞記念として、しがぎんホールで第5回公演「天と地のコスモロジー」を上演されましたね。
中村 ●バツハの時代は、毎週新しい作品が生まれ、その音楽をいつでもどこかで聴くことができました。そのように作り手と弾き手がいつも共にいて、さまざまな境界線にある音楽を現代の音楽として演奏会場に運び、あらゆる世代の人とメッセージを伝え合える媒体でありたいと思っています。

高橋 ●基礎研究はできるだけ教えるけれど、応用の世界は自分たちでやりなさいということですね。若い方を育てるのは、とてもやりがいがあるでしょう。

高橋 ●昨年11月、滋賀県文化奨励賞受賞記念として、しがぎんホールで第5回公演「天と地のコスモロジー」を上演されましたね。
中村 ●バツハの時代は、毎週新しい作品が生まれ、その音楽をいつでもどこかで聴くことができました。そのように作り手と弾き手がいつも共にいて、さまざまな境界線にある音楽を現代の音楽として演奏会場に運び、あらゆる世代の人とメッセージを伝え合える媒体でありたいと思っています。

中村 ●若い人たちはいろんな場所で芽が出て、大きくなつて花が咲き、また新たな種を残していくようになりま。そういう意味で本当に大きな仕事に関わっていると思います。

高橋 ●中村さんの音楽にはさまざまな可能性を感じますが、新たな作品の構想は、どこまで描かれていますか。
中村 ●まだ描かれていない風景や将来像を描くことが作曲家の仕事です。共に生き続けること、死者を悼むこと、生命が輝くこと、3点が交差するところに新たな作品を提供したいのです。例えば近江八景の版画は世界中の方がご覧になるのに、そこから発する文化、精神を表現した音楽はどなたもお聴きになっていません。また、これまでに私がふれてこなかった茶の湯からも、音楽で表わされるべきものが溢れています。

高橋 ●ぜひとも、近江八景から音楽を作っていたらいいですね。
中村 ●それから今年の9月17日に草津市の西方寺で楽舞台「鑑真」を上演します。クラムジカの活動ともども、ご注目いただければ幸いです。
高橋 ●これからの音楽活動が本当に楽しみです。本日はありがとうございました。



昨年10月のシアターピース「かしの木物語」より。子どもたちが「かしの木のうた」を大合唱(長浜市立下草野小学校)。

※シアターピース…舞台上の限定された演奏行為ではなく、客席、通路、バックステージ、バルコニー席など、劇場全体を多角的に使用した演奏スタイル。同じ舞台上でも「音源」が移動するやり方やパフォーマンスを含む動きが加わる。